

## 審査の結果の要旨

氏名 大久保 実香

著しい人口減少と高齢化のなかで山村集落での生活が続く背景として、家族と世代の視点が注目されている。しかし、先行研究では、親が集落に居住していない者も含めた他出者に関する検討、共同作業や祭り、自治組織といった地域社会に関する事柄への他出者のかかわりに関する検討が行われてこなかった。本研究は、親が出身村に居住していない者も含めた「他出者」に着目し（研究の視座）、共同作業と祭り、それを支える自治組織に焦点をあてた（研究の対象）ものである。明らかにすべき課題として、(1)現代の山村集落における共同作業と祭りの実態を他出者の存在に着目しつつ明らかにすること、(2)その過程で他出者が山村集落に果たしうる役割とその特性を検討すること、を設定した。情報収集は、居住者、他出者、他出者二世らを対象とした聞き取り調査、他出者を対象とした質問票調査、共同作業や祭りへの参与観察、および文献調査により実施した。

以上の序章に続き第2章では、山梨県早川町各集落の事例から、山村集落における共同作業と祭りについて検討した。早川町内の各集落における共同作業や祭りは、その作業量や内容を縮小・簡略化させ、頻度を低下させる方向に変化してきた。神輿を担げなくなっても境内に飾るなど内容を変更しながらも大切な部分を継続しようとする実践がみられた。人数が少ない動ける居住者に負担が偏るなか、作業の一部を専門的サービスに依頼する対応や、他出者への協力要請など負担を共有できる範囲の検討が行われていた。

第3章では、山梨県早川町茂倉集落の事例から、山村集落と他出者との関係について検討した。茂倉集落では、1970年以降に他出した44世帯中40世帯が、区費の納入、総人足と区総会への参加を通して区の一員としての役割を果たしていた。総人足に参加した他出者の約8割は親が集落に居住していなかった。また、区会議員などの役を務める他出者もいた。集落で過ごした経験を持ち、その後も継続的なかかわりをもっていた他出者は、集落の自然・歴史に関する知識・技能・作法を居住者と共有し、居住者や他出者らとの間に親交と仲間意識をもっていた。家産を所有し、先祖に関する行事や他の家との結びつきに関する行事へも関わりうる存在だった。

第4章では、同じ山梨県早川町茂倉集落の事例から、山村集落における祭りの変容と他出者との関係について検討した。茂倉集落の春祭り・夏祭りは、若者組の解散、それに代わった保存会形式での運営を経て、その後は区役員と氏子総代による運営が行われるよう

になり、さらに御輿・相撲が子供御輿・子供相撲のみに縮小された。若者が減少する中、その時々祭りのあり方や担い手について、他出者も含めて検討され、納得できるあり方で実践されていた。祭りの変容とは、これまでの慣習・規範と現状との間に折り合いをつけた実践をし、新たな慣習・規範を共有することだったといえる。他出者は、必ずしも居住者と同等の責務を果たさずとも、やれる範囲でかかわることが認められていた。

第5章では、滋賀県多賀町杉集落の事例から、居住者のいない集落で続く共同作業と祭りについて検討した。杉集落は、居住者がいなくなっただけで既に40年が経過していたが、2014年現在も杉区としての活動が継続されていた。他出世帯は、現在の居住地と杉集落の自治組織の双方に加入していた。寺、墓、神社、共有林といった資源の存在が共同作業と祭りの定期的な開催につながっており、これが他出者間の交流の機会になっていた。森林のように動かさない資源が集落の場所に存在するため、集落の場所に集まった作業も行われていた。

そして、第6章は総括と結論である。本研究から、親が集落に居住しなくなった後も他出者が山村集落にかかわり続けていたこと、家のメンバーとしてのみならず村のメンバーとしても他出者が一定の役割を果たしてきたことが明らかになった。他出者は、集落への継続的なかかわりによって得られた経験的特性に加え、従来の家の成員でもあることから、家産や先祖などに関する事柄にも関わるといった外部者では獲得しにくい特性をもっていた。共有・共用する資源とそれをめぐる定期的な契機によって人々が直接的に繋がり合い、土地に根差した資源を通じて人々と土地とが直接的に繋がらうという形で、たとえ居住者がいなくとも、他出者などによって山村集落の営みが部分的であれ続いていく可能性がある。このような現状理解に基づき、他出者を二地域居住者として位置づけること、自治組織への二重加入のあり方を検討すること、また空き家の維持管理主体としての他出者を積極的に位置づけることなど、有益な政策的含意を導出した。

以上のように、本研究は実証的に山村地域に対する現状認識を深めることで将来の政策展開に示唆的な結論を得ることに成功しており、学術上および政策上の貢献が大きい。よって審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。